

金子文子に、少女期を植民地朝鮮で暮らし、朝鮮人への苛酷な仕打ち、虐待、搾取、酷使を目的の当たりにし、植民地支配、さらに帝国主義の基盤となっている「国体」の矛盾を鋭く衝いた。その思想と行動を追い、学ぶ。

鈴木裕子

金子文子（1903〜26年）が死去してから92年あまりが経過するが、文子の願いと逆により日本と韓国朝鮮との間にはさまざまな未解決の問題・難問がある。文子が若年とはいえ、近代日本の膨張主義・侵略主義・植民地主義を「推進」するために大きな役割を果たした近代天皇制国家について、明快な分析をし、すぐれた表現を残したことは画期的な意義をもつ。

植民地家庭での体験と「無籍」であること

このような視点・思想をもち得たのは、1912年、父方の叔母夫婦の「養女」候補として朝鮮に渡り、植民地家庭の一員になり、日本植民者が朝鮮人に対してどのような苛酷な仕打ちをしたのか、

文子は植民地意識丸出しの叔母

・叔母たちの朝鮮人への蔑視意識、同じく在朝日本人でありながら貧しい生活を強いられている人びとへの差別意識をみてとり、大きな疑心と反感をもたざるを得なかった。植民地家族の跡取りに相応しくないとして「養女」失格となった文子は、祖母・叔母から「女中」同様な酷い扱いを受け、何かにつけて暴言を吐かれ、暴力さえ

全人類の善である」



金子文子(左)と朴烈の公判の様子。(提供/毎日新聞社)

金子文子に生きた理想

振るわれた。

冬の寒さのなか戸外に捨て置かれ、食事さえ与えられなかったこともある。辺りを彷徨ううちに知り合いの朝鮮人のおかみさんに「また、おばあさんに叱られたのですか」「お昼ご飯いただきましたか」といわれ、文子が朝から食べていないというところ、おかみさんは「まあ、かわいそうに！」「麦ご飯でよければ、おあがりになりませんか」と声を掛けてくれた。このときのことを文子は自叙伝『何が私をこうさせたか』(岩波文庫、2017年)のなかで「朝鮮にいた水い水い七か年の間を通して、この時ほど私は人間の愛というものに感動したことはなかった」と綴っている。酷い仕打ちに耐えられず、わずか12歳足らずの文子は、一旦は自殺を試みるが、「世にはまだ愛すべきものが無数にある」と思い返し、自死を留まる。

帰国直前の1919年、朝鮮民衆による3・1抗日独立運動が起これ、居住していた美江(慶尚北道)でもその光景を目の当たりにする。のちに文子は、後述する

「裁判」の24年1月23日の第4回訊問で、「朝鮮の独立騒擾の光景を目撃して、私すら権力への反逆

気分が起り、朝鮮の方のなざる独立運動を思う時、他人のこととは思得ぬほどの感激が胸に湧きま

す(鈴木裕子編『金子文子 わたしはわたし自身を生きた』梨の木舎(2013年に増補新版刊行)、同書に自叙伝『何が私をこうさせたか』も収録)と回想している。

父母は、いまの言葉でいえば「法律婚」ではなく、文子は無籍の子どもであった。このため世間から差別され、正式な就学もできなかった。19年4月、文子は日本に帰るが、引き続き事実上の「無籍者」としての辛い体験を余儀なくされる。しかし、裏返しているなら、「無籍」であるがゆえに文子が「国籍」という狭い境域に囚われず、物事を俯瞰的にみる視点がもてたのではないだろうか。

さらに父、祖母や叔父たち、知人男性たちから差別されたこと。また実母が夫(実父)に捨てられたあと、男性への依存からなかなか脱却できず、つまり経済力をもたぬがゆえに、女性が自立できない性差別の現実を直視させられたこと。加えて民族差別の実情を、朝鮮での実見実聞や、日本滞在中の朝鮮人を通して痛感したことなどがあげられる。

「権力を否認し反逆」する文子の虚無主義

23年9月1日、関東大震災が起き、多くの犠牲者、家屋の焼失に加え、人災というべき朝鮮人・中